

# うたうひと

Utau Hito Directed By Ko Sakai and Ryusuke Hamaguchi  
酒井耕・濱口竜介監督 東北記録映画三部作 第三部

9/6 (日) 無料上映会+お茶会

## Utau Hito

Directed by Ko Sakai and Ryusuke Hamaguchi

民話は、遙か昔から、口伝えで親しい人々の間に受け継がれてきました。

今より娯楽が少なかった時代、民話は人々の楽しみのひとつだったことでしょう。

子どもは枕元でお母さんに聞いたり、子守りをしながら近所のおばあさんに聞いたりしたそうです。

『うたうひと』は、そんな東北の昔ばなしと、人々の暮らしの思い出が収録された映画です。

物語の考察なども含め十数話を収録しています。おちゃっこしがてら、ぜひ観にいらして下さい。

### 『うたうひと』無料上映会+おちゃっこ@南三陸町

“東北の民話”を集録した映画の無料上映会を開催します。

お茶菓子をご用意してお待ちしております。

- 日時：2015年9月6日(日) 13:30 ~ 16:30 (上映2時間+お茶)
- 会場：南三陸町ひころの里 松笠屋敷 ●参加費：無料 (予約不要・先着順約40名)
- お茶菓子付き (福岡から、おいしいお菓子を届けて頂きます)
- 問合せ先：0226-46-4310 (ひころの里管理事務所) 090-9859-1517 (相澤)

主催：一般社団法人 silent voice | 協力：envisi・南三陸町観光協会・一般社団法人震災リデザイン  
協賛：ひころの里 | 企業メセナ協議会 GBFund (東日本大震災 芸術・文化による復興支援ファンド)

**GBFund**

東日本大震災  
芸術・文化による  
復興支援ファンド

企業メセナ協議会

## 『うたうひと』が生まれるまで 小野和子

山のムラや海辺の町を歩いて、民話を語ってくださる方を求める旅をつづけてきました。そして、いつの間にか四十年あまりが過ぎ、数え切れないほどたくさんの方に出会いましたが、なかでも初めて民話を聞かせてもらった老媪のことを忘れることはできません。

明治十五年生まれの方でした。十六の歳に山ひとつ越して嫁ぎ、二十八で夫に死なれたといひます。すでに男の子ばかり四人いたそうです。けれども、難儀して育て上げた息子たちは、戦争を挟んでの戦死病死で四人とも先立ったというのです。お会いしたときは、遠い血筋に身を寄せて、縁側に一人用のプロパンコンロを置いて煮炊きする暮らしでした。

わたしは立て続けに三回訪ねました。三回目、別れを告げて帰るとき、横長の本を一冊出してきて、わたしに渡されたのです。擦り切れた表紙に『赤穂義士誠忠畫鑑』とある古い絵本でした。貧しくて小学校にも行けなかったその人は字が読めないのです。本と名のつくものはこの一冊があるばかりだといひ、「おれの話聞いてもらってうれしかった」と涙ぐまれました。それが最後になったあの日、老媪は縁側に正座して、本を抱いて帰るわたしに深々と頭を下げられたのでした。

以来、わたしはその本を携えて、語ってもらった民話を紹介し、その人生を語り続けてきました。民話を語る人はかならず語ってくれた人—死者を語ります。死者への思いがあるから《言葉》は生命をもち、昔と今をつないで無限の「未来」を生きるのだと思います。

東日本大震災のあとに、せんだいメディアテーク（仙台市複合文化公共施設）の紹介で出会った映画監督の濱口竜介さん・酒井耕さんは、「百年後の未来」に語り継がれる被災者の《言葉》を映像で記録しようと試みておられることを知りました。そして、このお二人に、震災の年の八月に、南三陸町で開催した「第七回みやぎ民話の学校」（みやぎ民話の会主催）の様子を映像で記録してもらうことになりました。被災した沿岸地域には、かつて民話を語っていただいた方がたくさんおられました。その消息を訪ねるなかで、癒やし難い傷を負った語り手たちから、「形あるものはすべて無くしたが、気がつけば胸に民話が残っていた」という尊い言葉を聞きました。

その言葉に励まされて、民話の語り手六名に被災の体験を語ってもらう「学校」を開いたのです。二百人もの参加者を迎え、語り手たちはまるで民話を語るように、苛酷な「あの日」を語ってくださったのでした。

学校開催に先立って、語り手を訪ねて打ち合せをする段階から、監督たちは参加されました。カメラを持たず真摯な聞き手としての同行であったことが心に残っています。

両監督の第一作『なみのおと』に描かれたのは日常的な風景を背景に、「あの日」をしずかに語る被災者の声と、時折、発せられる問いによって構成された画像でした。次の作品『なみのこえ』も同じような手法で撮影がすすんでいました。それは、切実な現実を背負って、なお明日を生きるために紡ぎ出される物語の群—民話の世界に深く重なる様相を見せて、ふしぎな時空を形成していました。

東北記録映画の三本目として「民話の語りを映像で撮りましょう」と、監督お二人からいってもらったのです。わたしは喜んで、それぞれに二百話近くを伝承する貴重な語り手三名を選んで、すぐにその「語り」を、一度二度と撮ってもらいました。一話でも多くの伝承話を残すことに、わたしは性急でした。けれども、両監督の意図がそこにあることに気づいたのはしばらくしてからでした。

語られる民話そのものの記録も然りながら、「語り」の影の存在ともいえる「聞く」ことにこそ、「語り・聞く」という営みの本体が在るのではないか、そこをこそ撮りたいのだ、というのでした。わたしは胸を衝かれました。

『うたうひと』という映画はこうして生まれました。カメラと二人の監督の存在がそこにあって、語り手と聞き手は、透明であたたかい空気につつまれながら、手を取り合って「物語」の世界へと入っていったのでした。

（東北記録映画三部策パンフレット掲載）

主催者より：2015年早春、東北地方に伝わる民話の映画『うたうひと』を、東北の美しい港町で上映してもらいました。その主催者から「観に来てくれたおばあちゃんたちが、すごく楽しんでくれた！」という感想を聞き、もっとたくさんの東北の方々に映画を観て頂きたくて、この無料上映会を企画することにしました。このチラシを見て、映画をご覧になりたいと思われた方は、いつでもご相談下さい。（連絡先：サイレントヴォイス 03-3584-0286 相澤／小林まで）